

「ざる箱庭遊び」による子ども理解

山上 克俊¹⁾・岡田 珠江²⁾

本稿は、学級活動中で行う表現活動の一つとして、箱庭療法のエッセンスを取り入れて山上が考案した「ざる箱庭遊び」を紹介したものである。まず、「ざる箱庭遊び」の実施上のねらいを詳述した後に、8カ月程の期間をあけて実施した2回の実践を報告した。実践報告では自分自身の家庭の状況や学級の状況を表した作品や、子どもの変化の見られた2つの事例について取り上げ考察した。実践の結果、「ざる箱庭遊び」は、活動そのものが子どもたちにとって楽しいものであり、子どもの心が満たされるための学級での表現活動として有効であり、また、教員は作品から子どもの持つイメージや物語の内容との関連を考えたり、子どもの背景をふまえて観たりすることで、その子どもの置かれた状況や子どもの心の理解を深める手段になることを示した。

キーワード：学級・箱庭療法・「ざる箱庭遊び」・紙粘土

I. はじめに

箱庭療法は、河合隼雄（1969）によって日本に紹介され、すでに広く使われており、その効果は言うまでもない¹⁾。しかし、学校で教職員が実施するには難しい問題がある。それは、箱庭療法が、基本的に個人の面接の枠組みで実施するものであり、また熟練するまでにも時間がかかり、誰でもできるといったものではないからである。また、設置場所も必要になり、購入費用の問題もある。つまり、学校現場では、箱庭療法がどこでも実施できるわけではない。

岡田らは、学校現場で教師が子どもたちの心理的発達を促進できる「お絵かき遊び」を開発し、その有効性を実証している²⁾。その影響を受けながら、山上（2008）は、心理療法の本質を活かした、学級での活動として心理的表現をする試みをしてきた³⁾。また、箱庭療法の学習をしながら、教職員としてどう活かせるかを考えてきた。その中で山上は、学校での卒業制作の一場面でざると紙粘土を組み合わせた作品を作ることを思いつき、それをきっかけに、「ざる箱庭遊び」を考案するに至った。

それはざるに紙粘土を付け、自分の置きたいアイテムを置いて、自分の世界を作りながら遊ぶものである。「ざる箱庭遊び」を学級で実施したところ、子どもの心が満たされたり、生き生きとしたりする様子が見られ、子どもの心的世界をより理解することができた。そこで本稿ではそれを報告する。

II. 目的

本研究は、箱庭療法のエッセンスを取り入れ考案された「ざる箱庭遊び」を紹介するとともに、小学校3年生

を対象に期間を置いて学級活動の時間に2回施行した結果を報告し、これが子どもの心の理解を深める活動であるかを検討したい。

III. 「ざる箱庭遊び」とは

「ざる箱庭遊び」とは、活動主体者がざるに紙粘土をつけ、その上に自分の好きなアイテムを置いて、彩色などをし、物語を作るといった一連の活動である。教職員である山上が、子ども理解をよりいっそう深めるために、箱庭療法のエッセンスを取り入れ考案したものである。活動主体者を子どもと想定しているが、もちろん大人も行うことができる。「ざる箱庭遊び」という名称の中に「箱庭」という言葉があるように、箱庭療法の要素がこめられている。しかし、箱庭療法とは異なる点も見られる。

二つの手法の違いを述べる。まず、箱庭療法は、英語で“Sandplay Therapy”というように、砂は、治療における大切な要素の一つになる。箱庭療法における砂は、クライアントの退行を促し、無意識的な世界をもたらすことで治療に大きな働きをする。一方、「ざる箱庭遊び」では、砂は使わず、紙粘土を用いる。紙粘土は、初め柔らかく感触もいい。自由に形をとることもでき、その後固まって安定する。

アイテムを置く場の違いとしては、箱庭療法では、木でできた箱が使われており、大きさは「箱を腰のあたりに置いたとき、大体視界の中にはいる程度」として57×72×7cmぐらいが適当としている。「ざる箱庭遊び」では、直径25cmの竹製のざるを使うこととし、箱庭療法に比べると範囲も狭い。まず、アイテムを置く場となる「ざる」であるが、「ざる」のよさは、その柔らかい感じと弾力性のように思われる。それは、素材となる竹そのもののへの親しみや味わいとも関連するもので、東洋的なよさがある。次に、形が円いところが「ざる箱庭遊

1) 熊野市立有馬小学校

2) 三重大大学教育学部附属教育実践総合センター

び」の特徴になる。円というのは、一つの安定した形である。鳥のようでもあり、その中に自分の「世界」を自由に作ることができる。

その「ざる」に置くアイテムであるが、箱庭療法では、その人の世界を作るために、人、動物、木、花、乗り物、建築物、橋、柵、石、怪獣などのさまざまなアイテムが必要である。「ざる箱庭遊び」でも、それに準じてアイテムを用意する。人や動物などについては、何かのおまけのようなものを用意し、花や木、草といったものは、100円ショップなどに売っているものをペンチで切るなどして用意できる。大きな違いは、箱庭療法では使ったアイテムは、また棚に戻し、何度も使えるのに対して、「ざる箱庭遊び」では、紙粘土につけてしまうので壊さない限り使うことはできない。また、活動主体者に事前にどんなことをするのか知らせた上で、自分の置きたいものを持ってきてもらうこともできる。

実施時間は、箱庭療法がおおよそ1時間の面接時間の中で十分収まるのに対して、「ざる箱庭遊び」の場合、これまでの経験から見て授業時間の2コマを続けてこの活動にあてることが必要で、すべてを終えるには100分程度見積もる必要がある。

実施場所については、箱庭療法では、面接室などで箱庭療法のセットがある部屋でしか行うことができないが、「ざる箱庭遊び」では、教室のような場所でも十分行うことができる。

表1 箱庭療法と「ざる箱庭遊び」の違い

	箱庭療法	ざる箱庭遊び
場	木の箱	ざる
素材	砂	紙粘土
形	四角	円
範 囲	57cm×72cm×7cm	約25cmの円
アイテム	再利用可 面接者が準備	再利用不可 面接者が準備 活動主体者も準備可
作 品	残らない (写真等で記録)	残る
実施時間	面接時間内	授業時数で2時間
実施場所	面接室など	教室など

IV. 試行の方法

(1) 対 象 小学3年生27名(男子13名・女子14名)

(2) 実施回数及び時間

1回目 200X年5月、2回目 200X+1年2月

学級活動の時間を使って、それぞれ2コマ程度

(3) 準備物

実施者：ざる、紙粘土、人形などのアイテム

活動主体者：自分の置きたいアイテム、絵の具

(4) 実施手順

〈準備段階〉

①「ざる箱庭遊び」の概要を知る

子どもたちには、製作日の一週間前までに、あらかじめ「ざる箱庭遊び」がどのようなものであり、どんなふうに作るのかなど簡単な手順を知らせ、実施者の方でどんなものを準備しているかも伝えておく。

②それぞれの置きたいアイテムを集める

子どもたちには、自分の家にあるもののうち要らなくなったおもちゃなどを持ってきてもよいことを話す。また、持ってきても自分の要らないものがあれば、人にあげたり、交換したりしてもよいことも伝える。

〈製作段階〉

①紙粘土をざるにつける

まず、ざるに紙粘土をつけていく。紙粘土をまんべんなくつけてもいいし、紙粘土でトンネルや建物を見立てたものなど自由に作ってもよい。

②自分の好きなものを置いていく

子どもたちの置きたいものを好きなように置いていく。粘土が乾いてしまわないうちにしっかりつけないと、後からボンドが必要になる場合もある。

③着色する

着色は、してもしなくてもよい。塗る時期も、紙粘土をつけてすぐ塗ってもいいし、後から塗ってもよい。①から③までの製作段階では、活動が平行してもよく、製作者の好きなようにしてよい。

④物語を作る

「作品についてお話をつくってください。」と促し、できるだけ作ってもらうようにお願いする。

(5) 実施手順上の注意とねらい

子どもたちにとって「ざる箱庭遊び」が、安心して心の表現ができ、生き生きとした活動となるために、次のようなことに留意して行う。

- ① 教科の時間にはしない。
- ② 教師が作品の出来不出来を評価しない。
- ③ 自由に作らせる。干渉しない。
- ④ 求められた手助けをする。
- ⑤ 話をしてきたら、聴く。

①や②は、この時間が、図工という教科ではなく学級活動の時間であり、作品の良し悪しを評価される時間ではないことをはっきりさせるねらいがある。③も同様に図工であれば指導するような場面であっても、あえて子どもたちの好きなようにさせる。製作過程で、紙粘土をつけながら置きたいものを置いたり、色を付け出したりしても、子どもたちの自由にさせる。④のように、逆に頼られれば必要な手助けはする。材料を切ったり、必要

なものを一緒に探したりといったことである。また、⑤も、子どもたちは、教師にいろいろな話をしてくるので、話の内容に応じて「そうなんや。」「へえ。おもしろいね。」などと短い言葉で返してあげたり、長い話にもうなずいて聴いたりしていく。

これらは、「お絵かき遊び」¹⁾の方法を参考に、この時間が自分の心を自由に表出・表現できるようにしたものである。

V. 結果及び考察

1. 子どもたちのとりくみの様子

(1) 教師の観察から

このクラスの子どもたちは、男子も女子も活発で意欲的に活動をするものの、集中して話を聴けなかったり、最後まで話を聴かずに質問したり、人の発言をさえぎったりと基本的なルールが入りづらいところがある。トラブルも多く、時としてけんかになるケースも見られる。また、家族関係の複雑さや家の中で甘えられないといった環境にいる子どもも見られる。そのような中で担任は、子どもの理解を図ろうとさまざまな取り組みをし、この「ざる箱庭遊び」もその1つとして実施した。

「ざる箱庭遊び」を先にあげた手順で実際に作り始めると、子どもたちは話をしたり、置きたいものを熱心に選んだり、交換したりしながら製作活動を続けていた。

1回目は、2コマを連続でとり、かなりの子どもたちが作品をほぼ作り上げた。それでも中には、さらに休み時間や昼休みにつけ足したり、色を塗ったりするということのように活動を楽しむ子どもたちもいた。1回目直後から、「楽しかった。」という声が多く、家でもこの活動が話題になったようだった。その頃は、まだ「ざる箱庭遊び」という活動の名称をつけていなかったのだが、1回目と2回目の間には、「ざるのやつ、またしよ。」「あれ、いつするん。」「世界また作ろう。」というように、2回目を心待ちにしていた。こちらから「2回目しよう。」と話すと、子どもたちは喜んでいた。

2回目は、イメージを持ちやすかったようで、再び材料を集めるのも楽しみのようだった。作りたいものを初めから決めて作る子どももいたが、集めたアイテムの何かに触発されてその場で何を作るのかを決める子どもも多いように見えた。1回目と同じように熱心にとりくみ、子どもたち同士がお話をしながら楽しんで作っている姿が見られた。

(2) アンケート結果から

2回目の活動が終わった後、次のようなアンケートをとった。

表2 アンケートの内容

1. 今回の活動は、どうでしたか。
2. また、やってみたいですか。
3. どんな物があればもっといいと思いましたか。
4. 工夫したことがあれば、おしえてください。
5. じゅうに思ったことを書いてください。

※1と2は、4択、3から5は自由記述

問1の「今回の活動は、どうでしたか。」の問いに対しては、81%にあたる22人が「とてもおもしろかった。」と答え、残りの5人が「まあまあおもしろかった」と答え、「あまり」「ぜんぜん」おもしろくなかったと答えた子どもはいなかった。また、問2の「また、やってみたいですか。」との問いには、78%にあたる21人が「すごくやってみたい。」と答え、「まあまあやってみたい」が5人で、あまりやりたくないが1人いた。このことから、子どもたちがこの活動を楽しく意欲的に行ったことがわかる。

また、問3から問5の項目については、「特にない」が多く、作品そのものを作ることに満足したのではないかと思われる。

2. 作品に表現されたこと

(1) 作品の傾向

作品には子どもたち独自の視点があり、その子どもの特徴がよく現われているものが多いと感じられた。作品を見ただけではよく理解できないものであっても、物語の内容を読むと、その子どもの置かれた状況と関連していることが多く、その子どもの世界を感じることができた。

そのほか、性別によって作品の傾向に違いが見られた。男の子の作品は、戦いをテーマにしたり、ポケモンなどのキャラクターをたくさん使ったりするものが多くみられた。話の内容も、戦いに関わるものが目立っている。また、女の子の作品は、花やビーズ、きれいな石などを置くものが多く、色も多彩にぬって仕上げる傾向が見られた。

(2) 家庭の状況を表したと思われる作品

ほとんどの作品は、いわば子どもの置かれた状況を表したものと言ってよい。その一つに女兒Aの作品をあげる。(写真1)

女兒Aの作ったお話 1回目

このせいかい、動物だけの場所でのんびりくらしていました。ある時にとりがきました。次にそこに住んでいた牛がきて「モー」となっていました。とりは、そこらでうろろして帰って行きました。次の日その場所にはだれもいませんでした。(記述通り)

作品を見ると、世界が二つになっているのがわかる。一つは、鳥のいるもじゃもじゃした緑の草のあるところであり、もう一つは、ビーズで敷きつめられて、花も咲いている牛の世界である。Aは、一人っ子であるが、両親が別居している。しかし、Aには、どちらの家にも居場所があり、父親と母親の仕事の関係で、日によって寝る家が違う。鳥のいる世界は、父親の世界と思われ、花の咲いた牛のいる世界が、母親の世界と考えられる。その二つの世界を行き来するAの様子がよく現われている作品だと言えよう。

(3) 学級の状況を表したと思われる作品

男児Bは、よく外で遊ぶ元気な子どもでもある。けんかやトラブルを嫌い、学級の中でも、人に優しく、学級の雰囲気をよくする動きをしている。学級の中で何かトラブルに巻き込まれても、ほとんど自力で物事を解決していくことができる、しっかりした子どもでもある。

Bの作品(写真2)は、見ただけでは何を表しているのか分かりづらいが、物語を読むことによってわかる。

男児Bの作ったお話 2回目

ある日、ガンダムと神様が遊んでいて、ガンダムがカバンを落としてしまって、そこで、パンダたちが拾って、だれのか分からなかったの、持って帰ることにしました。そして、パンダが、持っていることに気づいて、へんな目玉のおじさんとガンダムと神様がきました。そして、そして、ガンダムたちが、「お前は、おれのカバンをぬすんだろ。」と言いました。そして、パンダたちが、「ごかいだ。ごかいだ。」と言いました。そして、パンダが、ちゃんと理由を話したので、ガンダムもパンダが拾ってくれたので、おこったことをあやまっていっしょに遊びました。(記述通り)

さらに、Bとのやりとりでわかったのは、へんな目玉のおじさんが、パンダが持って行ったよということを告げ口したので、ガンダムと神様が気づいたとのことだった。ここで連想されるのは、ガンダムと神様が、実はクラスの元気なよくトラブルを起こす子どもたちを表わしているようだ。拾ってくれた可能性を考えられず、「ぬすんだ。」と決めつけるところは、クラスのトラブルの起きる状況によく似ている。パンダは、恐らくBを表している。

また、クラスの中には、トラブルをさらに大きくする目玉のおじさんのようなものいるところも似ている。この作品のよいところは、「ぬすんだ。」と決めつけたガンダムたちも、「ごかいだ。ごかいだ。」と話せばちゃんとわかったことであり、ちゃんと謝り、一緒に遊ぶことができたという結末である。3学期になり、トラブルがあっても、ちゃんと解決できるクラスになってきたことともつながっている。

(4) 子どもの変化が確認できた作品

①心のエコ活動を始めた女兒C

Cは、活発な女の子である。学校や学級の行事があると積極的に参加し、リーダーシップをとろうとする。低学年のときは、気が強く他の子を自分の思い通りにしたがるところがあり、トラブルが多かった。3年生になり、そういったことが続くのが心配だと母親は話し、小学校入学前に家庭環境が不安定な時期があり、母親はその影響も心配している。

担任は、母親に対してCのいいところを話し、「周りが見えて、力をうまくコントロールができるようになれば、他の子どもとのトラブルもなくなっていくし、コントロールできるようになりますよ。」と話す。実際Cは、3年生になってからも、前に出て何事も進めていき、友だちとの関係づくりも上手になっていく。

1回目の作品(写真3)は、「ポケモンランド」と題名がついており、ポケモンたちが楽しく暮らす国になっている。14匹のポケモンたちがにぎやかに暮らしていると説明している。戦いこそ表わされていないが、色使いや並べ方を見ても、男の子の作品のようにみえる。それが、2回目の作品(写真4)では、大きく変わってきている。

2回目には、Cは始めにプリウスを置いて作品を作っていた。物語を見ると次のように書いている。

女兒Cの作ったお話 2回目

この世界には、さまざまな人がエコかつ動を始めだしています。ある人は、はなや木をうえてみどりをふやしたり、ある人は、CO₂の出さない車プリウスに買い換え、エコを心がけています。そして、あきちにフルーツの森というのができました。でも、この町に出ている太陽はとてもあつくて、雨もあまりふりません。植物は、水がないとかれてしまいます。そこで、町人が考え出して5日目いい考えがうかびました。そうやって町はたちなおっていく、というお話です。(記述通り)

担任には、C自身がこの1年間にやってきたことを物語にしているように見える。この物語のプリウスは、C自身を表しているようである。それまでの彼女自身は、周りに騒音や排気ガスをたくさん出していた車だったのである。それを今は、「買い換え、エコに心がけてい」るのである。そうすることで、イチゴのように実のなる植物も手に入る。それでも、まだ太陽が熱すぎるという課題は残っているようだ。それでも、C自身が考えて、「たちなおっていく」というように読める。Cの持つ力の強さと成長を感じさせられる。

③母親からの愛情をほしがっていた女兒D

Dは、利発で物事によく気づき行動する子どもであり、学校では特に問題もなく過ごす。父親が単身赴任のため

不在で、ふだんは母親と2人で暮らしている。そこへ、3年生になってすぐに妹が生まれた。その頃から、家庭で母親を困らせることが多くなり、ある症状も出始める。しかし、母親は、早く姉として独り立ちしてほしいので、厳しくしつけ、風呂に入るのも、寝るのも一人でさせている。家庭訪問でそのことを聞き、担任は、「お母さんも大変だとは思いますが、甘えてくるものには、できるだけ甘えさせてやってください。」と話し、そうでないとDの行動や症状は変わらないと伝える。

1回目の作品(写真5)は、その後に作られたもので、次のように説明している。

女兒Dの作ったお話 1回目

この島は、羽と花と貝がたくさんある島です。車が4台走っています。この島は、一年中冬なので、今、雪がたくさんつもっています。ほとんどそうげんだけど、コンクリートのところも少しあります。木や草がたくさんあります。(記述通り)

車が4台というのは、家族を示しているように見える。島に見立てているが、陸地にたくさんの雪が積もっているのもわかる。気になるのは、「一年中冬」という言葉であり、Dの心の寒さや寂しさを表していると思われる。赤ちゃんが2人浜辺のところに並んで立っている。

母親も、7月の懇談会にこの作品を見て「一年中冬」が気になると話し、もう一度Dのことをしっかり見ていきますと話され、Dとの関係を見直していった。2学期の終わりの懇談時には、Dの症状はなくなり、家でも妹の面倒をすぐみるようになったと話された。

2回目(写真6)を見ると、1回目には雪だったところにたくさんの花が咲いている。Dは、物語の冒頭に「ここは、ハワイです。」と書いている。1回目のときには、赤ちゃんだったところに、二人の女の子が向かい合わせに置いてある。前は、赤ちゃんについて説明がなかったのが、今回は、「左側にいるのは、あたしんちの兄弟です。二人で仲良くすな遊びをしています。(記述通り)」と説明している。

1回目には、D自身も赤ちゃんであり、Dが母親に対してもっと自分のことを見てほしい様子が分かる。それが、母親からの愛情を得られたことで、2回目には、向かい合って仲良く遊ぶ姉妹として表現することができた。

このように、Dの心の変化と成長をこの二つの作品から読みとることができる。

VI. まとめと課題

本稿では、「ざる箱庭遊び」を紹介し、実施した結果

を報告した。この実践は、アンケート結果から子どもたちの満足度が高く、多くの子どもたちにとって表現活動そのもので何かしらのカタルシスが得られたことがわかった。また、子どもの中には先述したCやDのように期間を置いて実施することで作品に変化が見られた例もあった。

本実践では作品の製作のみならず、物語をつくってもらった。これにより作品からわかるイメージと物語の内容との関連を考え、その子の背景をふまえることで、その子どもの置かれた状況がよく伝わり、子ども理解を深めることになることができた。

これらのことから、「ざる箱庭遊び」は、子どもの心が満たされるための表現活動として、また、教員が子どもの心の理解を深めるために適切なものであると考えられる。

今後の課題としては、「ざる箱庭遊び」の表現を通して子どもの理解を深めることができることを、学年の違いや発達課題の違い、一対一の個別で扱った場合などさまざまな事例において、実証していくことである。

実施する上での課題としては、置き場所や費用の問題がある。作品を置いておく場所が教室には限られていることや、紙粘土から簡単にアイテムが落ちてしまうこともあり、置き場所とともに、どのようにすれば作品を丁寧に扱っていきけるかを考える必要がある。費用については、子どもたちにどれだけ負担してもらおうという問題もある。こちらの用意したものをたくさん使う子どももいれば、全く使わずに自分の持ってきたものだけで作り上げてしまう子どももいるからである。ざると紙粘土の費用は、全員が使うものであるから子どもたち自身に負担してもらおうものの、こちらで用意したアイテムの費用をどれだけ子どもたちに負担してもらおうかということは考えていかなければならない。これらの課題を検討しつつ、今後もこの「ざる箱庭遊び」を継続的に実施し、検討を重ねていきたい。

VII. 参考文献

- 1) 河合隼雄：「箱庭療法入門」誠信書房、1969
- 2) 岡田珠江・松本裕子：学級で心を育む（Ⅰ）、三重大学教育学部附属教育実践総合センター紀要27号、41-51、2007
- 3) 山上克俊：学級集団の中で心を育む「遊び」の試行、三重大学教育学部附属教育実践総合センター紀要28号、83-90、2008



【写真1 女児Aの作品 1回目】



【写真4 女児Cの作品 2回目】



【写真2 男児Bの作品 2回目】



【写真5 女児Dの作品 1回目】



【写真3 女児Cの作品 1回目】



【写真6 女児Dの作品 2回目】